

「新党」は政治変革を起こすのか——マレーシア政治への一視角

川端 隆史 外務省¹

1. 問題の所在

(1) なぜ「新党」に着目するのか

現代政治において、「新党」というキーワードからは、日本の55年体制の崩壊など、政治的に大きな変革期を迎える時期に新党の活動が影響を及ぼした事例が想起される。今回のマレーシアの総選挙では、まだ歴史の浅い野党である「新党」人民公正党(Parti Keadilan Rakyat: PKR)が大躍進を遂げ、野党第一党に躍り出た。しかも、PKRは、連邦下院でマレー人20人、華人7人、インド人4人、州議会でマレー人20人、華人15人、インド人4人を当選させている。1999年と2004年の総選挙ではPKR所属の当選者がマレー人のみであったことを考慮すれば、今回の総選挙結果は、国政レベルにおいて、独立以来の統一マレー国民組織(United Malays National Organisation: UMNO)、マレーシア華人協会(Malaysian Chinese Association: MCA)およびマレーシア・インド人会議(Malaysian Indian Congress: MIC)が中心となって運営してきた政権党と野党との対抗の文脈においては、マレーシア史上初の多民族政党となったと言える結果を残した。

本稿では、新党という観点からマレーシアの政党政治を考察した上で、2008年総選挙結果の分析を通じて、新党がいわゆる「民族政治」と言われてきたマレーシア政治に変革をもたらす可能性について論じ、マレーシア政治の将来を考えるための論点を提示したい。

なお、本報告では半島部における政治動向を中心

にして分析している。サバ州のサバ団結党(Parti Bersatu Sabah: PBS)も1985年に結成された「新党」として、サバ州に野党政権をもたらし、その後のサバ州政治の展開において重要な役割を果たしている²。そのため、本来ならばPBSも、マレーシアのマクロ政治全体の観点から「新党」という位置づけで分析すべき価値があると考えられる。しかし、国政レベルにおける与党連合との対抗における新党の役割という点に重きを置いて、先行の研究がほとんどない視角について試論的な考察を行いたいため、本稿ではPBSについて特段に言及しない。

(2) マレーシア政治における「新党」の位置づけ

1957年のマラヤ連邦独立以来、マレーシア政治の中心として活動してきた政党は、基本的に、政権党がUMNO、MCAおよびMICを中心とした与党連合、それに対抗する野党は汎マレーシア・イスラーム党(Parti Islam SeMalaysia: PAS)と民主行動党(Democratic Action Party: DAP)という構図が維持されてきた。1971年に国民戦線(Barisan Nasional: BN)が発足した時には、多民族政党を標榜するマレーシア人民運動党(Parti Gerakan Rakyat Malaysia: Gerakan)や野党PASが参加するなどの修正が見られた。しかし、基本的に与党は、政党名が示すように民族別政党であるUMNO、MCA、MICが中心となってきたことには変わりがない。

野党についてはどうか。PASとDAPは基本的には

¹ 本報告の内容は、外務省および関連団体の見解・立場をいかなるかたちでも代表するものではなく、報告者の個人的な研究成果に基づくものであることをあらかじめお断りしておく。

² PBSについては、山本博之「プラナカン性とリージョナリズム」(地域研究コンソーシアム『地域研究』Vol.8, No.1所収、pp.52-69、京都大学地域情報統合センター、2008年)、佐藤考一「サバ統一党(PBS)と州議会選挙」(桜美林大学『国際レビュー』第12号、pp.7-31、2000年)などの先行研究がある。

特定の民族の権利擁護を掲げず、特定の民族の利益代表ではないという建前をもっている。しかし、PASはイスラーム主義を掲げる政党であり、マレーシアではムスリムの圧倒的多数がマレー人であるため、PASは事実上マレー人の権利擁護の政党となっている。また、DAPは、1980年代に華語による高等教育機関「独立大学 (Universiti Merdeka)」の設置要求を行ったことなどにも示されているように、主要な支持層は華人である。したがって、イデオロギーや政策的主張を考慮すれば、両党は特定の民族を支持母体とする民族別政党と言える。

このように、マレーシア政治は与野党ともに民族別政党が中軸となり、擬制的に各民族・地方の代表の意見を反映しているとするBN体制の優位の下に展開されてきた。過去の選挙結果が示すように、5・13民族暴動事件の発端となった1969年総選挙結果を除けば、下院におけるBNの議席数は、憲法改正に必要な議席数である定数の3分の2以上を維持してきている。BNが圧倒的に優位な状況は、その裏返しとして、野党やNGOからはBNによる独裁体制であるとか権威主義的な体制であるとの批判も展開されてきた。

しかしながら、1990年総選挙以降の選挙結果を見ると、これまでの「BN圧勝」と表現できるBN体制の盤石さに楔を打ち込むような結果となっている。しかも、1990年以降の選挙結果は、2004年総選挙結果を除けば、BN体制の揺らぎが徐々に顕在化するという方向へと向かっている。

なお、本稿で扱う新党とは、結社法上の正式な登録を行った政党であり、かつ、総選挙・州議会選挙において一定の議席や得票を獲得し、マレーシア政治の在り方、特に野党連携において重要な役割をとった政党を指すこととする。この観点に立てば、検討すべき新党は、46年精神党 (Semangat 46: S46) と、Keadilan時代を含むPKR³である。

2. 新党の役割

(1) 「新党」を分析するための視座

本報告が注目する新党の役割とは、野党連合が形成されるとき、新党が必ず中心的な存在を担っていた点である。この点が注目される理由は次の通りである。これまでの総選挙において、BNが政府与党の立場を活かして優位に選挙戦を進める一方、そもそも不利な立場にある野党が共闘することもなく、BN体制優位を結果的に支えてしまっていた。

主要野党であるPASとDAPは、単に支持母体の民族が異なるだけでない。PASはシャリーアに基づいた国家と社会の実現を目指す一方、DAPは世俗国家を強く指向し、華語教育による大学の設置など華人の権利を強く主張してきた経緯があり、イデオロギー的にも大きな隔りがある。こうした民族的・イデオロギー的な差異により、両党が共闘することはなかった。このことは、BNが選挙戦をきわめて有利に進めてきた原因の1つでもある。「新党」は、「水と油」とも言える主要2野党の根本的な隔りを橋渡し、結節する役割を果たしたのである。

次に、本報告で扱う2つの新党の結成には共通するパターンが見られることを指摘したい。つまり、UMNOが党内権力闘争をきっかけとした分裂に直面し、反主流派が新党を結成した上で、既存野党のPASとDAPとの共闘を野党連合という形で行い、野党全体の躍進とBNの後退をもたらしたというパターンである。言い換えれば、マハティール政権下において結成された新党の共通した特徴は、「反マハティール」という対立軸という文脈において与党UMNOから分離する形で設立されたという経緯がある。そして、新党を中心として、それまで有効な連携が行われてこなかった既存の野党であるPASとDAPも含めた野党連合が形成され、この野党連合が機能し、野党は選挙において躍進するという結果を得るというのがパターンである。

一方で、S46が結党後10年足らずで解党し、PKRも2004年総選挙での惨敗から消滅寸前とまで言われた経緯を考慮すれば、2008年総選挙までは新党は短命で終わるという、「新党」の役割がいわば「新党ブーム」でとどまり、時間が経てば、結局新党の活動が終息する歴史を繰り返すかのように見えた。実際、

³ PKR は、1999 年に結成された国民公正党 (Parti Keadilan Nasional: Keadilan) を前身とする政党。2003 年、マレーシア人民党 (Parti Rakyat Malaysia: PRM) が合流し、PKR に改名した。

PKRの前身であるKeadilanでは、筆者が2003年にインタビューした某幹部自身の口から“Keadilan sudah habis.” (Keadilanはもう終わりだ。)という発言があった。このことはPKRが惨敗に終わった2004年総選挙結果で現実味を増し、マレーシアでは政治家・有識者から市井の人々まで、PKRは消滅寸前であるとの見方が支配的になっていた。

しかしながら、今回の総選挙では、既に冒頭で触れたようにPKRが大躍進を遂げた。この結果は、報告者にとって、一般的に一過性の存在に過ぎないとみられていた新党について、より深く考察する必要性を強く感じさせた。一部には、PKRを中心にマレーシアは二大政党制へと向かうとの過熱気味の議論も行われており、PKRはS46とは明らかに異なった道を歩む新党となった点が注目される。このことをマレーシアの政治史の文脈において理解するため、以下では、まず新党の歴史と活動についての概略を述べる。

(2)「新党」の歴史

S46は、1987年のUMNO党役員選挙の総裁選において、現職マハティールに対してラザレー・ハムザが僅差で敗退したことが発端となり、UMNOから分裂したラザレー派が結成した新党であった。S46が結成されて初めて迎えた1990年総選挙においては、S46とPASのイスラーム共同体統一組織 (Angkatan Perpaduan Ummah: APU) とS46とDAPの人民戦線 (Gagasan Rakyat) という2つの野党連合が形成された。PASとDAPは直接の連携関係にはなかったが、S46が緩衝材となり、少なくとも両党の衝突を避ける機能が働いた。

こうした野党間の協力を背景に、1990年総選挙においてAPUはクランタン州議会を奪取することに成功し、半島部においては、1971年のBN体制発足以来初めて、BN支配下にあった地方議会全13州が野党に切り崩された形となった⁴。

1995年総選挙においても、APUはクランタン州政権を維持することに成功した。ただし、同州におい

てはPAS所属議員が多数派であり、S46はジュニア・パートナーにとどまった。1996年、ラザレーがUMNOに復党したことでS46は解党し、マレーシア史上初めて有効に機能した野党連合の形成を促した新党の歴史は幕を閉じた。

Keadilanは、マハティールとアンワールの政争を発端とし、1998年9月のアンワールの政権追放・逮捕を背景として、UMNOから離脱した政治家と、民衆の間に広まった“Reformasi” (改革運動) を母体として形成された「新党」であった。Keadilanは、1999年総選挙の際、PASとDAP、知識人からなるマレーシア人民党 (PRM) とともに代替戦線 (Barisan Alternatif: BA) を結成した。S46時代の野党連合と異なる点は、「水と油」のPASとDAPが共に参加しており、マレーシア政治史上初めて主要野党による共闘が実現したという歴史的な事態を迎えたことである⁵。BA全体としては、1999年総選挙において、クランタン州の野党政権維持に加えて、トレンガヌ州を38年振りに野党政権としたという大きな成果を収めた。ただし、Keadilan自体は、連邦下院ではPASとDAPには遠く及ばない5議席を占めるのみで、BA主要3党のなかでは最小政党にとどまった。結果的にBAの恩恵に主に預かったのは、連邦下院において過去最高の26議席を獲得し、クランタン州とトレンガヌ州において最大政党となり州首相を輩出したPASであった。2001年にDAPがBAを脱退すると、PASがKeadilanに対して圧倒的な多数派となったこともあって野党連合のバランスが失われ、BAの求心力は急速に低下した。野党連合の機能が相当程度低下した状態で迎えた2004年総選挙は、BA構成党のPKRとPASはともに惨敗、一方でBAを脱退して既定路線に回帰したDAPは安定的に議席を確保した。この結果は、当時、現地では国民の間でアブドゥラ新政権への期待感が高まった「ご祝儀相場」的な様相もあったが、先にも言及したように、報告者も含め現地政

⁴ これよりも前、サバ州では1985年にPBSによる州政権が誕生し、野党州となっていたことは、冒頭に言及したとおりである。

⁵ 長らくDAPの指導者として活動してきたリム・キッシアンとカルパール・シンは、再三PASのイスラーム国家をめぐる主張に警戒感を顕わにしている。例えば、Lim Kit Siang, *BA and Islamic State*, Selangor: Democratic Action Party, 2001やKarpal Singh “Pakatan Rakyat not about Islamic State”, 8 April, 2008 (URL at <http://dapmalaysia.org/english/2008/apr08/bul/bul3460.htm>)を参照。

治関係者から一般市民まで、マレーシア政治は「BN圧勝」というBN体制の優位性は揺るがず、PASとDAPのイデオロギーの差異から生じる野党連合の脆弱さが露呈したと感じさせる雰囲気があった。

このような2004年総選挙以降の政治情勢をふまえると、2008年総選挙に際して、PKRを軸とした新たな野党連合の人民戦線（Barisan Rakyat: BR）が結成され、アブドゥラ首相自らが「驚きであった」と言うほどの野党の大躍進という総選挙結果に終わったことは、急展開の事態であった。その背景には、マレーシア社会の変化とそれに呼応したPKRの役割の変化が重要であった。2008年総選挙におけるPKRが果たした役割は、2004年総選挙までのPKRの役割とは大きく異なっている。以下ではこの点について詳細に論じる。

3. 2008年総選挙から読み解く

新党の役割の変化

(1) 主要野党の「つなぎ役」から「牽引役」へ

PKRが今回の総選挙で野党第一党となり、新党としては初めて州首相を輩出した点に注目したい。これまでの野党連合においては、新党のS46もKeadilan/PKRも、既存野党の、特にPASのジュニア・パートナーにとどまっていた。州議会選挙にみられるように、野党連合で最も恩恵を得たのはPASであり、州内閣においても州首相をはじめ主要なポストはPASが占めていた。かつての野党連合における新党は、確かに野党連合結成のきっかけを担った役割は大きかったが、PASとDAPを1つの政党連合の枠内に引き寄せることはできず、両党を単に結節させ、あるいは衝突を避けるだけの存在でしかなかったことと対照的である。

(2) PKRの変化 惨敗に終わった2004年選挙以降

PKRが新党としてこれまでと異なる役割を担うようになった経緯として、次のような変化が指摘できる。まずアンワール・イブラヒム元副首相の動向である。折しも2006年と2007年のUMNO党大会において、ヒシャムディン青年部長が演説中にマレー人のシンボルであるクリスを振りかざし、MCAをはじめとする華人社会において警戒感が増幅したり、2007

年にはヒンドゥー寺院の取り壊し問題がインド人社会の不安感を惹起させたりするなど、民族にかかる問題が続発していた。そこに、アンワールは多民族の公正な社会を実現する、マレーシアの担い手は多民族であるという観点から強いメッセージを発信していった。無論、個人の影響に帰結することを意味するのではなく、組織や選挙戦略等に関して今後の更なる研究が必要であるが、UMNOで4回の総選挙を闘い抜き、かつ、1980年代のUMNO危機を経験した政治の手練れであるアンワールの存在は大きいと考えられる。

PKRは、Keadilanとして結党した経緯から、アンワール支持派の政党であった。しかし、アンワールは職権濫用罪と異常性行為罪で投獄されていたため、表だって政治活動を行えない問題があった。彼が表舞台に登場するようになったのは2004年3月に総選挙が行われた後、同年9月に異常性行為罪が最高裁で逆転無罪となり、釈放された後である。マレーシアでは法律上、刑期終了後の一定期間は公職に就くことができない。アンワールは、2008年4月15日まで政党の役職を含むあらゆる公職に就くことが禁止された。釈放されてしばらくの間は、米国の研究機関で客員研究員をするなど海外での活動が目立っていた。時折マレーシアに帰国した際に多数の支持者が集まることはあったが、基本的には海外を拠点として、国内では表立った活動を行っていなかった。アンワールは、しばらくしてからマレーシアに帰国し、PKRの顧問として国内で演説等の活動を活性化させるようになった。アンワールが野党政治家としてマレーシア内政に深く関わる意志が明示的に現れたのは、2007年5月のPKR党大会であった。この党大会でアンワールは総裁選への出馬を表明していたが、結社登録官より職権乱用罪の刑期満了から5年を経っていないとして党職への就任が不可能との判断を受けたため、総裁選当日になり不出馬を表明し、党員にワン・アジザを支持するよう訴え、実質上は自らが党を指導すると宣言した⁶。

総選挙前の2008年2月23日、人民戦線BRの結成が

⁶ 中村正志、「第12回マレーシア総選挙：華人・インド人に見限られた与党連合」（アジア経済研究所『ワールド・トレンド』2008年6月号、pp.31-37）。

宣言され、共同規範として人民宣言と人民の声が採択された⁷。総選挙において最も重視されたのは選挙協力であった。これまでの総選挙においては、野党候補が競合した結果、非BN票が割れてBN候補の当選を実質的に支えてしまうことがあり、また、野党どうしで他党出身の候補者を積極的に後押しすることは見られなかった。今回の選挙協力が機能したことは選挙結果が如実に語っている。総選挙後、BRは、4月1日に野党連合による円滑な州政権運営のための枠組みとして人民連合(Pakatan Rakyat: PR)へと発展した。

(3) S46 との比較における PKR の違い

PKRとS46との比較で大きな差は、イデオロギー的な点である。S46のイデオロギーは、その党名が示すように、UMNO結党時の精神、つまり真のマレー人の擁護者となるとのイデオロギーであった。一方で、PKRは多民族政党を明示的に志向している。

両党はマハティールとの権力闘争に敗退した政治家が発足させたが、反マハティールという軸が失われ、一旦は求心力を低下させたPKRが、政治闘争の方向性を変えることによって生き残りを図ることに成功したと言える。

4. 今後の展望と論点——

マレーシア政治は変革期を迎えたのか？

以上、PKRとS46という2つの新党についての比較考察を行い、今次総選挙におけるPKRの変化について論じた。PRによる野党政権と今後の動向は、始動したばかりであり未知数である。最後に、今回の総選挙後の政治動向からみられる新党にかかわる重要な論点を提起し、マレーシア政治の展望に言及して結びとしたい。

(1) 「民族の政治」は終わったのか？

本フォーラムの論点である「民族の政治は終わっ

たのか」という問いに関して、報告者の考えを述べたい。今回の総選挙結果の見方として、本フォーラムの他の報告者からも指摘があったように、「華人とインド人は野党にスイングした」ことが一般化しつつあると言ってもよいだろう。冒頭に掲げたデータが示すように、PKR所属の立候補者・当選者の民族的な属性をみても、PKRは、事実上のマレー人政党といわれた時代を脱し、多民族政党へと移行した。

これに関連して興味深いデータを別表1の通り提示したい。マレー半島部においては、与野党候補者の民族的属性が一致していない選挙区が29選挙区あった。これらの選挙区のほとんどはマレー人有権者数が少ない選挙区であり、いわゆる混合区や華人選挙区が大多数を占めている。こうした選挙区では、特定の民族的属性をもつ候補者が自らの民族からの支持のみで勝利できず、民族を超えた集票が必要となる。つまり、民族的選好による投票行動というマレーシア政治における古典的なパターンは通用せず、民族を越えたcross votingが発生していると考えられる。これは、「民族の政治」というテーマを考える上で興味深い現象である。

後に述べるように、PKRが多民族政党化し、民族を超える投票行動がより顕著に表れたことを考慮すれば、「民族の政治」は終わりに向かいつつあるのかのように映る。しかしながら、総選挙後の政治家たちの発言をみれば、「民族の政治」を形成している問題が明確に焦点化したことがわかる。「民族の政治」の本質的な問題が浮き彫りにされ、マレーシアは、今後これまで通り「民族の政治」の論理を中心に動いていくのか、それとも「民族の政治」を超克していくのか、その岐路に立たされているといえる。こうしたきっかけをもたらすことになったのが、まさに新党PKRであった。その意味では、政治変革を起こす予兆が感じられる。

ただし、報告者はPKRに対して過大な評価を行うことについては極めて慎重である。確かに今回の総選挙で野党はこれまでにない連携をみせたが、PASとDAPのイデオロギー自体が変わったわけではない。PKRは未だ単独ではBNに対抗するほどの実力はなく、特定の地域で強いPASとDAPの連携・協力がなければBN政権を打倒することは難しいと考えるからである。

⁷ Malaysiakini, February 23, 2008, URL at <http://www.malaysiakini.com/news/78511> <http://harismibrahim.wordpress.com/2008/02/> Haris Ibrahim, "Hidup Barisan Rakyat!" in The People's Parliament, February 23, 2003 at URL <http://harismibrahim.wordpress.com/2008/02/23/hidup-barisan-rakyat/>

では、こうした基本認識をもとにして、今回の総選挙がもたらした今後のマレーシア政治において注目すべき論点について、新党の観点から以下に要点を提示したい。

(2) 二大「連合」政党制への可能性

第1に、二大政党制化をめぐる議論である。この議論は、今回の総選挙後に初めて出現したものでなく、目新しいわけではない。しかし、今回の選挙結果を受けて、議席占有率でも得票率でもこれまでになく与野党の勢力が拮抗したため、二大政党制の論議が加熱している。

しかしながら、マレーシアが二大政党制へ向かうという議論は時期尚早の感が否めない。なぜならば、BNはそれ自体を政党として登録しているとはいえ、実体上は、民族あるいは地方の代表が合議の上でパワーシェアリングする仕組みの域をでていないからである。野党連合の側も、PRの政党登録について、各党幹部は当面様子を見ると慎重な発言している。

また、既に言及したように、そもそもPASとDAPには基本的にイデオロギー的に大きな隔たりがある。PASは、イスラーム国家の樹立およびそれに関連する不可欠の論点——イスラーム刑法、イスラーム税制——といった点について今回の総選挙で表だった言及を避けたが、PASの政党としての組織構造自体がイスラーム国家を実現するために改組されたという歴史があり、DAPの世俗国家の議論とは根本的に相容れない。DAPがBAを脱退した根本原因はPRでは棚上げにされているにすぎず、問題そのものは解決していないことには変わりがない。

したがって、少なくとも短期間のうちには、野党側が1つの政党としてBNに対抗する可能性は未知数であると思われる。仮にPRが今後も連合を維持することができるのであれば、それは、二大政党制ではなく、二大「連合」政党制とでも呼ぶべきものであろう。

(3) 反マハティール連合から反 BN 連合へ

NEP をめぐる対立軸の顕在化

第2に、マレーシア政治における論点の変化である。新党の歴史について概観したとおり、S46も

KeadilanもUMNO党内でのマハティール対反マハティール派（非主流派）の権力闘争の文脈で分裂した新党であった。しかし、今回の総選挙においては、マハティールが引退している以上、当然のことながら「反マハティール」という対立軸は存在しえない。今回の総選挙結果は、単にUMNOの権力闘争という政局が影響しているのではなく、NEP＝ブミプトラ政策をめぐる議論が大いに影響していた（個々の議論は他の発表者に譲る）。つまり、引き続きNEPを推進するBNと、それに反対して民族の区別なく平等な資源の再分配をもとめるPRの対立であったと解釈できる。

これまで、野党は、特にDAPは明示的にNEPの撤廃を主張してきており、同様の主張をするPKRが第一党となったことで、与野党間の政治的争点はNEPへと軸が動きつつあると言えるだろう。総選挙後、例えば、MCAのOng Tee KeatがBNの多民族化について言及したように、これまでは表だって議論されることが少なかったNEP・ブミプトラ政策の在り方について公開の場で議論されるようになった。こうした動きはマレーシアの開発体制の根本にかかわる議論であり、ブミプトラ政策の是非をめぐる議論に収斂していくとみられる。

(4) サバおよびサラワク州との関係

第3に、サバ州・サラワク州と新党の関係である。これまで、新党はサバ州およびサラワク州において候補者を立てて、BNが圧倒的優位な両州において一部地域で善戦した。他方、野党候補者の競合が発生していたことも事実であり、このことは、森下報告と山本報告で指摘されるようにサバ州およびサラワク州における独自の政治論理が背景に働いていることが推察され、PKRを中心とした野党連合の選挙協力の在り方の大きな課題の1つと言えるだろう。また、アンワールがサラワク州出身の連邦下院議員の切り崩し工作をしきりに行っているという噂も絶えない。BNは、サラワク州とサバ州で圧勝したことで、連邦政府を形成できているという状況である。

これまでのマレーシア政治研究においては、「半島部のみ」や「サバ・サラワクを除く」との注記がなされることが多かった。しかし、今回の総選挙結

果は、新党の視点からは無論のこと、マクロ政治全体を分析する上でも、もはや半島部のみに限定してはマレーシア政治のダイナミズムを十分に捉えきれないことが明示されたと言える。

(5) 改革勢力と伝統勢力の緊張関係

スルタンと PKR

第4に、スルタンと新党の関係である。スルタンは、前近代的な意味での国家ヌグリの残照ではあるが、マレー・ムスリムの守護者として象徴以上の役割を担ってきている。新聞報道などでは、トレンガヌ州首相の任命に際し、現職のイドリス・ジュソではなく、若手筆頭格のアフマド・サイドを指名したことが大きな話題となっていた。しかし、ここではトレンガヌの問題とは別個に、新党とスルタンという観点からの論点を提起したい。

総選挙後、州首相人事で初めに大きな焦点となったのはペラ州であった。なぜなら、ペラ州議会の第一党はDAPであったが、ペラ州憲法は州首相がマレー・ムスリムであることを求めているからである。DAP所属のペラ州議会議員にはマレー・ムスリムはおらず、必然的に第二党PKRか第三党のPASから州首相が任命されることとなる。最終的には、PAS所属の州議会議員が州首相に就任した。数の上からみればPKR所属議員が就任することが順当であろう。三党の合議でPAS議員が推薦されたが、それ以前に、三党はそれぞれが推す人物のリストをペラ州スルタンに提出している。この背後にどのようなやりとりがあったかは不明であるが、改革者PKRと伝統的なヌグリの長であるスルタンの間の微妙な関係を推察することもできる。これに関して、4月12日に行われたマレー団結行動戦線（Barisan Bertindak Perpaduan Melayu）の集会において、クランタン州王家の皇太子の演説のなかに下記のような言及があったことが象徴的である。

“... keputusan pilihan raya lalu menunjukkan masyarakat Melayu berpecah belah dan sedang berhadapan dengan kaum lain yang lebih dominan dari segi politik dan ekonomi...”

（先頃行われた総選挙の結果は、マレー人社会が分裂

していることを示している。また、マレー人社会は、政治と経済の観点から、より優越している他の民族の前に晒されているのである）

この演説では、他の民族がマレー人に優越しつつあると主張している。経済面についてはこれまでも言われてきたことであるが、政治面についても他の民族が優越していると発言している。BN体制においては、全体として議席は減らしてもUMNOの比率は高まっている。マレー人社会が分裂すると他民族が優位に立つ余地を与えてしまうという危惧の表明である。PKRは、マレー人議員の数は過半数を若干上回るにとどまり、PKRの伸張は、NEP廃止の主張とも相俟って、既存制度の保護下にあるマレー人にとっては挑戦と映るとも解釈できよう。こうしたことは、スルタンと改革者としてのPKRの間に微妙な緊張関係を示唆している。

5. むすびにかえて

以上、新党という切り口から今回の総選挙結果について分析を行った。PKRを中心とした野党連合がNEP・ブミプトラ政策というマレーシアの開発体制の根本に関わる問題について、マレーシア史上初めて議論しうる勢力となったことは事実であろう。そして、新党PKRの役割も、既存野党のつなぎ役やジュニア・パートナーという地位から脱却している。こうしたPKRの現状について、過大な評価をすることは慎重にすべきではあるが、今後のマレーシア政治の動向の鍵を握る存在となったと言える。

NEP・ブミプトラ政策に関する議論の比重が高まること自体、これまでのマレーシア政治が「民族の政治」を軸に展開してきたかを如実に表している。「民族の政治」は終わりを告げたのではなく、「民族の政治」がどのような形で再論されていくのか、重要な分岐点に立たされたと言えよう。

別表 与野党の立候補者の民族属性が異なる選挙区での選挙結果（半島部・連邦下院）

ケダ州

		政党				有権者の民族構成比率				
選挙区		与党	民族	野党	民族	マレー人	華人	インド人	その他	
P17	Padang Serai	MCA	華人	PKR	インド人	54.72	22.64	<u>22.28</u>	0.36	マレー人区

ペナン州

		政党				有権者の民族構成比率				
選挙区		与党	民族	野党	民族	マレー人	華人	インド人	その他	
P46	Batu Kawab	Gerakan	華人	DAP	インド人	20.4	55.57	<u>23.66</u>	0.37	華人区
P47	Nibong Tebal	UMNO	マレー人	PKR	華人	45.2	37.54	<u>17.08</u>	0.18	混交区
P51	Bukit Gelugor	MCA	華人	DAP	インド人	15.16	74.25	<u>10.15</u>	0.44	華人区
P52	Bayan Baru	MCA	華人	PKR	マレー人	39.14	48.46	<u>11.75</u>	0.65	混交区

ペラ州

		政党				有権者の民族構成比率				
選挙区		与党	民族	野党	民族	マレー人	華人	インド人	その他	
P54	Gerik	Gerakan	華人	PAS	マレー人	73.49	17.87	7.46	1.18	マレー人区
P60	Taiping	PPP	インド人	DAP	華人	35.45	49.93	<u>13.86</u>	0.76	混交区
P65	Ipoh Barat	MCA	華人	DAP	インド人	13.21	63.60	<u>22.89</u>	0.3	華人区
P72	Tapah	MIC	インド人	PKR	華人	47.27	31.70	<u>20.66</u>	0.37	混交区
P74	Lumut	MCA	華人	PKR	マレー人	48.77	38.49	<u>12.03</u>	0.71	混交区
P76	Teluk Intan	Gerakan	華人	DAP	インド人	36.16	43.82	<u>19.96</u>	0.06	混交区
P77	Tanjong Malim	MCA	華人	PKR	マレー人	51.23	30.43	<u>18.22</u>	0.12	マレー人区

パハン州

		政党				有権者の民族構成比率				
選挙区		与党	民族	野党	民族	マレー人	華人	インド人	その他	
P80	Raub	MCA	華人	DAP	マレー人	49.12	43.51	6.48	0.9	混交区
P83	Kuantan	MCA	華人	PKR	マレー人	59.97	35.93	3.88	0.22	マレー人区
P89	Bentong	MCA	華人	PKR	インド人	43.06	47.28	9.02	0.64	混交区

スランゴール州

		政党				有権者の民族構成比率				
選挙区		与党	民族	野党	民族	マレー人	華人	インド人	その他	
P94	Hulu Selangor	MIC	インド人	PKR	マレー人	53.94	26.67	<u>18.98</u>	0.41	マレー人区
P100	Pandan	MCA	華人	PKR	マレー人	49.34	45.04	5.15	0.47	混交区
P103	Puchong	Gerakan	華人	DAP	インド人	43.58	40.78	<u>15.3</u>	0.34	混交区

連邦直轄区KL

		政党				有権者の民族構成比率				
選挙区		与党	民族	野党	民族	マレー人	華人	インド人	その他	
P124	Bandar Tun Razak	MCA	華人	PKR	マレー人	52.73	39.47	7.17	0.61	マレー人区

スグリ・スンビラン州

		政党				有権者の民族構成比率				
選挙区		与党	民族	野党	民族	マレー人	華人	インド人	その他	
P128	Seremban	MCA	華人	DAP	インド人	41.8	45.80	<u>12</u>	0.3	混交区
P132	Telok Kemang	MIC	インド人	PKR	マレー人	40.6	36.10	<u>22.2</u>	1.1	混交区

ジョホール州

		政党				有権者の民族構成比率				
選挙区		与党	民族	野党	民族	マレー人	華人	インド人	その他	
P140	Segamat	MIC	インド人	DAP	華人	41.25	47.65	<u>11.03</u>	—	混交区
P144	Ledang	UMNO	マレー人	PKR	華人	52.92	42.41	4.6	—	マレー人区
P148	Ayer Hitam	MCA	華人	PAS	マレー人	56.39	39.57	4.02	—	マレー人区
P151	Simpang Renggam	Gerakan	華人	PAS	マレー人	54.51	35.24	<u>10.12</u>	—	マレー人区
P153	Sembrong	UMNO	マレー人	PKR	華人	54.09	36.20	9.63	—	マレー人区
P158	Tebrau	MCA	華人	PAS	マレー人	49.34	36.97	<u>13.47</u>	—	混交区
P162	Gelang Patah	MCA	華人	PKR	マレー人	33.54	54.06	<u>12.22</u>	—	華人区

凡例：(1)網掛けのある欄は当該選挙区で勝利した政党を示す。

(2)インド人の構成比率に下線を付した選挙区は、インド人比率が10%を超しているもの。

出典：The Star、New Straits Times、Berita Harianをもとに筆者作成。